

殺人と自殺のあいだ

— 犯罪の深層 —

問 庭 充 幸

歴史的にみると犯罪概念にもいろいろな系譜があるが、近代以降ではなんと言っても法的な規定が中心をなす。しかし法には強い一義性と長期の一貫性が要求されるため、現代のような複雑かつ急激に変動する時代の犯罪を正確にとらえ、適切に処理し切れているか疑問である。普段はあまり意識されていないが、その認識いかんは犯行結果の処理(刑罰)にも微妙な影響を与えるであろう。

このような課題(争点)を生み出す基本的な要件の一つに、典型的な犯罪としての殺人と自殺のとらえ方、あるいは殺人認識における自殺(性)の位置づけの問題がある。殺人罪は刑法一九九条で「人を殺した者は、死刑又は無期若しくは三年以上の懲役に処する。」と規定している。こ

の意味は主体と客体を明確に分離した上で、主体としての自己が客体としての他者を故意に、すなわち殺意をもって殺すということである。だから刑罰もそれなりに重くなるのは当然だということであろう。

しかし今日の凶悪犯罪などを見ると、主体としての自己が単純に客体としての他者を殺すというより、そういう形をとりつつ実際には自殺に近い自傷・自害の意味をもつものが多い。深層に自殺性を秘めた殺人といってもよい。そこでは、主体と客体が明確に分離できなかったり、他者に対してまるごとの殺意をもつとはいえないものも少なくない。現実の殺人犯はみな一つや二つ自らに傷を負っており、法が想定するような「無垢」な人間などいないからである。いいかえれば、殺人から自殺(性)を完全に排除して現実の殺人犯罪を正しく認識することは難しい。(法的に言えば、「故意」か「過失」だけで殺人犯罪を処理するのは現実には合わないということである。)

ところが法的認識はそうした現実の混沌とした深みにまではなかなか下りて来ない。規範的あるいは自己完結的な理念型を志向しようとするためであろうか、最初から殺人と自殺をはっきり分けてかかろうとする。そして殺人と自殺の関係が曖昧で割り切れないのは、逆にそれをとらえる

側の人間の眼が曇っているからに過ぎないと見る。もちろんそういう場合も多くあるし、認識する側も大いに自らの眼の曇りを取り除き眼力を養う努力が必要である。しかし犯罪行為者（主体）の側に実体として自殺性が混入しているとなると問題はそう簡単ではない。実際には両方の曖昧さが相互に重なり合って問題を一層複雑にしているのだから、ここでは後者についてだけとりあげたい。

殺人の動機にも金銭目的や虚栄、怨恨や痴情、さらに最近では自己の存在証明のためなどいろいろある。これらに自殺をからませる発想は、少なくとも社会科学的にはこれまでなかったように思われる。しかし仮にこれら動機の根底に自殺性が据えられていたらどうなるであろうか。いままで間違いないとされてきた動機にも微妙な色彩の変化が生じ、あるいはその一角が崩れだし、大いなる認識の変更を迫られるかもしれない。動機は犯罪にとって中枢的位置を占める責任の問題と緊密にからんでおり、また責任のあり方は刑罰の軽重（量刑）を規定する。したがって、そのとらえ方の違いはここで問題にしている殺人罪の概念内容にまで波及してゆく。犯罪についての法的な認識レベルを超えて社会学的認識が不可欠となるゆえんである。

殺人と自殺の関係性やその程度（濃淡）はさまざまであ

り、またその理由も千差万別である。それは動機や原因との関係で具体的なケースに即して分析してみなければならぬ。しかし以下では、まさにその深層にあつて殺人と自殺を結びつける、あるいは両者の間柄を規定する共通の原理（？）についてのみ検討してみたい。

二

これは表面の行為に直接現れてこないだけに把握が大変に難しい。差し当たり、精神分析論と宗教文化論の二つの視点からアプローチしてみることにする。

(1) 精神分析的視点

攻撃性の発露という見地からすれば、殺人と自殺は同じ攻撃が外に向くか内に向くかの違いである。この微妙な違いを精神の内側から追究したのが精神分析の立場だといつてよい。フロイトの後継者であり、精神分析的医学者でもあるK・A・メニンガーによれば「他人を殺したいと思う人は、この願望に対応するような懲罰を自分が受けなければならぬ」と無意識のうちにも感じる。その抑圧が「罪悪感」となつて自らを罰する自殺につながってゆく。この点は原初的にはすでにフロイトの罪惡論説の中にも片鱗が示されている。フロイトはさらにこれを「死の衝動」

(Thanatos) にまで遡って追究した。生命をつかさどる「生の衝動」(Eros) は現実の抑圧を突破して(他者攻撃)、安定した「快的」世界への自己回復を目指す力である。しかしそれだけではまだ不完全であり、生命は本来無機物(無)から生まれたものとすれば、「あらゆる生命の目標は静寂な無としての死」である。すなわち、究極の「快的」世界は絶対的な静寂の支配するニルバーナ(涅槃)の世界に入ることであり、それはまさに「死の衝動」(自己攻撃)に負っている。生命の「目標」としての「快的」世界という視点から見れば、生の衝動と死の衝動、他者攻撃と自己攻撃、サディズムとマゾヒズム、殺人願望と自殺願望は一つのものとして溶解してしまっている。もっとも、後にフロイトは生の衝動と死の衝動を矛盾した二つの衝動と考えたようだし、多くの研究者も死の衝動には否定的である。

他にも実存的精神分析の立場からする殺人と自殺の連続説がある。詳細は省くが、これらのいわゆる実存主義派の場合には急激な近代化・現代化の中で人間が「共同存在」性を体験できなくなり、「生の意味」を見出せなくなった時代の必然的結果だとしている点が特異である。

(2) 宗教文化的視点

つづいて殺人と自殺の關係に文化論の視点からも照明を当ててみよう。これは普段はあまり意識しない行動の深層にある民族宗教的な死生観の問題である。

わが国の死生観には独特のものがある。死ねば皆成仏し、いつかは神となって再生するという神仏融合的な觀念である。柳田国男は有名な「先祖の話」の中で述べている。死者の靈魂は最初のうちは「荒忌のみたま」で幽界にとどまるが、やがて「清浄」な存在となってあの世に登りつめていく。すなわち三十三年(三十三回忌)をメドに靈魂はついにこの世から離れて黄泉の国に行き、一部は普遍的な神(守護神)となつて家や地域を守り、また子孫の中に再生するのである。その意味では生と死は深いところで循環しつつ連続しているといつてよい。

このような死生観からすれば、殺人による死者は単純に排除して済むわけではなく、やがては日本の神として加害者の魂にも働きかける。それが共同体的な人間關係も手伝つて加害者の自罰意識を誘発し、やがては心の奥底に「償い」としての自殺性をも培つてゆく。逆にそうした自殺性を担保としてのみ日本の殺人はリアリティをもつていてよい。ベネディクトは欧米の「罪の文化」に対して日

本を「恥の文化」と規定したが、日本にも日本的な神による「罪の文化」は存在するのである。

かつて私は、殺人がただ殺人のためだけに実行される西洋的な「純粹殺人」に対して、殺人がギリギリのところまで自殺に結びつくような日本的殺人を「限界殺人」と規定したことがある。純粹殺人は「不条理」の殺人ともいわれ、カミュが『異邦人』の中で主人公のムルソーにアラビヤ人を射殺させ、それは「太陽のせい」だといわせたようなドライな殺人である。そういう視点からすれば、限界殺人はそこまでドライになりきれず、もつとウェットである。これも日本の神の影響であろう。もつとも、今日の若者の犯す犯罪の中には純粹殺人に近いものも多く含まれるようになった点は留意しなければならない。

西洋中世史家の鯖田豊之は、このような日本の生と死を連続体としてとらえる死生観に対して、西洋では生と死は完全に分離され、死は神どころか嫌悪すべき対象（死体）でしかないことを指摘している。それは西洋人の食肉文化と関係しているという。生々しい家畜の死体から人間の死体が連想され、抽象的な「死一般」の観念が育たなかったが、ここでは殺人が死者（被害者）の魂の回帰を通して加害者の自罰意識や自殺性を誘発するなどというこ

とはありえない。それどころか自殺は殺人同様に否定されるべき重い罪となりがねない。周知のようにキリスト教国家（とくにカトリック）で自殺を犯罪とは言わないまでも（かつては犯罪であった）、それに否定的で厳しい態度をとり続けているのはそのためである。

西洋と日本の死生観の違いを根底に据えて見ると、わが国の殺人の本質がよく見えてくる。こうして宗教文化の視点からも深層における殺人と自殺の緊密な関係が明らかである。

以上、精神分析論と宗教文化論の視点から殺人と自殺の間に横たわる深層原理をごく簡単に検討した。それが具体的な動機や原因に働きかけて犯罪の概念や責任論にどのような改変を迫るのか——殺人罪で言えば「故意」と「過失」二分論をどう乗り越えるか——という本来の課題についてはまた改めて考察することが必要である。